



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3216 号 2016.8.26 発行

建て替えか改修、課題山積 殺傷事件でやまゆり園

産経新聞 2016年8月26日



殺傷事件発生から1カ月を迎えた「津久井やまゆり園」。右下は献花台が設けられたテント＝26日午前、相模原市緑区

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され27人が負傷した事件は、26日で発生から1カ月。施設では25日現在で92人の入所者が生活を続け、今月末には一部が別の空き施設へ移る見通しだ。神奈川県は残る入所者や職員の心理的負担を考慮して施設を建て替えるか大規模改修する考えだが、最低でも数年かかる上、課題も山積している。

県によると、廊下や壁の血はきれいに拭き取られ、畳や布団も廃棄された。ただ悲惨な事件が起きた現場でケアを継続することは困難で、発生以来ずっと体育館で生活している入所者もいる。県は帰宅や別施設への移動を促してきたが、家族が高齢だったり新たな施設になじめなかったりして、戻ってくる人もいた。

今月末には、体育館にいる入所者ら約30人が、現在使用されていない県内の施設へ職

員と共に移動する予定で、県が鍵の取り付けや入浴施設の整備を進めている。それでも、被害のなかった居住エリアなどに約60人が残る見通しだ。

(相模原事件が投げかけるもの：優生思想、連鎖する怖さ 朝日新聞 2016年8月25日
障害者を虐殺したガス室が保存されている精神科病院＝ドイツ・ハダマー（1998年撮影）



相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件から26日で1カ月。「目標は重複障害者が安楽死できる世界」。容疑者が衆院議長あての手紙などに記したとされる言葉は、障害者の命と尊厳をないがしろにした過去の思想と政策を思い起こさせる。歴史を見つめ、事件が投げかけるものを考える。

(相模原事件が投げかけるもの：「優生」消えても、残る偏見 朝日新聞 2016年8月26日

強制不妊手術を受けたと訴

える女性。「優生手術の必要を認められる」と書かれた、宮城県の相談所の書類を前に（画像の一部を加工しています）

「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」。そう明記した法律が、1990年代半ばまで日本にもあった。条文は削除され、法律の名前も変わった。果たして、私たちは優生思想から自由になれたのか。

「国に謝罪と補償をして欲しい。障害者にも、子どもを産む権利と、生きる権利がある」



障害者刺殺1カ月、事件の根にいじめ／パラ代表語る 日刊スポーツ 2016年8月26日

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され、27人が負傷した事件から今日26日で1カ月となる。障害者を狙った卑劣な犯罪を受け、何を学ぶべきか。リオデジャネイロ・パラリンピック競泳女子日本代表で、先月31日に事件現場を訪れ、献花した成田真由美（45）に、思いを聞いた。

成田は先月31日、津久井やまゆり園を訪れ、献花をした。どんな思いで献花したのだろうか。

成田 迷うことなく、ただ、直感的に「行きたい」と思っただけです。人の命に、生き方に、人生に差別や区別などはないからです。第三者がその人の命を勝手に奪うなんてことはあってはならないと思います。私が障がい者だから献花に行ったのではなく、ただ、人として、行きたいと思ったから行きました。

事件から1カ月、逮捕された植松容疑者は調べに対し、「障害者なんていなくなればいい」などと、身勝手な自説を繰り返している。差別意識を独善的に募らせた憎悪犯罪（ヘイトクライム）との指摘もある。

成田 子どものいじめの問題も同じだと思います。大人がしているから、子どもがまねをするのではないのでしょうか。障がい者用の駐車場に車を止めるのも、障がい者用のトイレを使うのも、車いすやベビーカー利用者がいるのに平気でわれ先にエレベーターに乗り込むのも、ほとんどが健常者の大人です。その大人が子どものころ、その上の大人から、していいことと悪いことを、教わらなかったからかもしれません。

事件を受け「障害者への理解」という言葉が論じられる。だが、日本代表としてパラリンピックを長年戦ってきた成田の思いは、少し違うところにある。

成田 まだ「障がい者への理解」という言葉の話から、しないといけないのだなと思いました。「健常者への理解」はすでに深まっているのでしょうか。「理解」といった大げさなものではないのではないのでしょうか。ただ、目の前にいる人を、認めるとか理解するとかではなく、自然に、空気のように、そこにいる、そこにあるということが、別になんでもないことのようになればいい。私はそう思っています。【構成・清水優】

◆相模原障害者施設殺傷事件 7月26日未明、相模原市緑区の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者が次々と刃物で刺され、19人が死亡、24人が負傷した。結束バンドで縛られるなどした職員3人もけがをした。神奈川県警は同日、女性入所者1人に対する殺人未遂容疑などで、事件直後に出頭した元施設職員植松聖容疑者(26)を逮捕。27日に容疑を殺人に切り替えて送検した。8月15日、女性入所者9人への殺人容疑で再逮捕した。

ともに暮らす社会へ 障害者施設ルポ

井上充昌 森本美紀 朝日新聞 2016年8月22日
食堂で飼育しているウサギを見つめる入所男性＝広島県東広島市



相模原市の障害者施設で入所者19人が死亡した事件から、まもなく1カ月になります。事件からは、



障害者への無理解が浮き彫りになりました。ともに暮らす社会を考えるため、障害者を取りまく状況を3回にわたりお伝えします。まず、事件が起きた現場と同規模の施設を訪ねてみました。

■139人、139色の個性

広島県東広島市の県立施設「松陽寮」には139人が入所し、障害の程度や特性によって四つの「ファミリー」に分かれて暮らす。

午前8時半。朝礼で記者が紹介されると、特に重度の37人が入るファミリーの責任者、深谷成治さん(58)から「ぜひ、うちの取り組みを見て」と声をかけられた。

深谷さんが担当するファミリーは施設改修のため、昨年7月からプレハブに入居する。この日は月に数回の外出日。午前10時半、深谷さんは正木祐治さん(55)ら3人と一緒に車で約3分のファミリーレストランに向かった。

同じ席についた正木さんに笑いかけたら、返ってきたのは「べーっ」。「これがあいさつなんです」と深谷さん。メニューを指して「これがいい？ それともこれ？」と聞かれると、正木さんは全部うなづく。

職員が注文したフライドポテトは、正木さんの大好物。ポテトとアイスクリームをほお



ばり、顔をくしゃくしゃにして笑顔になった。ほおばりすぎて口元を汚すと、職員は顔をほころばせて拭く。思わずこちらも笑顔がこぼれる。

正木さんは松陽寮で暮らして約20年になる。てんかんがあり、突然意識を失って倒れることもあるが、この笑顔で職員の人気者だ。

(ともに暮らす社会へ) 地域の中で自分なりに 意思、口癖やしぐさで

朝日新聞 2016年8月23日



シソのふりかけで、自分好みの味にととのえる岡部亮佑さん(中央)。母の知美さん(左)と中田了介さん(右)が笑顔で見守る＝いずれも東京都内



地域社会で暮らす障害者たちは、どうやって思いを伝えているのでしょうか。会話することや体を自由に動かすことが難しくても、それぞれの方法がありました。

午後4時、東京都三鷹市の障害者施設から出てきた岡部亮佑(りょうすけ)さん(23)がつぶやいた。

「だっだっ、はあい」

相模原殺傷 「我が家」の日常、遠い道 事件1カ月 毎日新聞 2016年8月26日
神奈川県は改修、立て替え検討

19人の犠牲者が出た相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件は26日、発生から1カ月が経過した。園を設置した神奈川県は再生に向け、施設の改修か建て替えかのいずれかの道を検討しているが、運営の正常化にはなお時間がかかりそうだ。事件で奪われた入所者や家族の穏やかな日常は、まだ戻ってこない。

園は八つの「ホーム」と呼ばれる居住スペースに分かれ、事件の現場となったホームは現在、利用していない。県によると25日現在、入所者138人のうち2人が入院しているほか、34人が他施設へ移り、26人が園内の体育館で生活を続けている。

簡易な改修などは済ませたものの、入所者の家族会は、家族らに園の再生のあり方についてアンケートを実施し、意見集約を図っている。県は家族の意向を踏まえ、10月中に園の再生の方向性を決定する方針。改修なら1年、建て替えの場合は5年がかかる見通しだ。

3人の死者が出たホームで被害を免れた50代男性は、市外の施設への移動が決まった。80代の父親は5年前に転んでけがをし、自宅に引き取るのが難しいという。「環境が変わると動揺し、感情が過敏になる」と心配を募らせる。園の速やかな再開に向けて改修を希望したが、「入所者も職員も事件を思い出すので、十分なケアが必要」と強調する。

5人が犠牲になったホームにいた50代女性は事件後、自宅に身を寄せた。当時は眠っていたため惨劇を目撃しておらず、80代の母親は我が子の落ち着いた様子に胸をなで下ろす。「早く園の生活を取り戻したい」と語った。

植松聖(さとし)容疑者(26)が園に勤務していた時に担当したホームにいて無事だった70代男性は事件後、家族に植松容疑者の人となり語る仕草を見せたという。60代の妹は「事件には触れなくなかったのが、詳しく聞かなかった」と明かした。

園の職員も入所者の支援に懸命だ。ある非常勤職員は「入所者の日常を取り戻すことが第一」と意気込む。職員の間で事件を話題にすることはあまりないといい、「忘れようとしているし、忙しくて考える余裕もないけれど、いつも心に引っかかる」と話した。【蒔田備憲、杉直樹、遠藤大志】

<相模原殺傷>語れぬ生きた証し 遺族、匿名に葛藤

毎日新聞 2016年8月26日



19人が死亡した障害者施設「津久井やまゆり園」には、今なお多くの人たちが花を手向けに訪れている＝相模原市緑区で2016年8月25日、喜屋武真之介撮影

「近所に何も話していません。名前は伏せてください」。神奈川県内に住む女性が自宅の玄関前で重い口を開き、そっと目を伏せた。女性の50代の兄は相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で刃物で刺されて死亡した。近所の人や親族には、

事件に巻き込まれたことを知らせていない。葬儀はごく一部の身内と園の関係者だけで営んだ。

兄は生まれつきの障害があり、言葉で意思や感情を伝えることが困難だった。30代半ばでやまゆり園に入所し、約20年にわたって園で暮らしていた。「幼いころは一緒に遊んだ」という女性だが、兄との思い出をあまり語ろうとしない。「障害者への偏見がある。同情されるのもつらい。隠しておけば余計な心配をしなくて済む」。兄の被害を隠す理由をそう説明した。「園は兄にとって第二のふるさとだった」とも言う。

園で働いた人々の記憶には、兄の「日常」が刻まれていた。元職員は「何かを伝えたいと思うと、表情に力を込めて、訴えてきた」と振り返る。家族と一緒に写る古い写真を大切にしていた。写真の中の母親の顔を職員の前で指してみせ、職員が「お母さん、今は何をしているのかな」と問いかけると、うれしそうにほほ笑んだという。

事件の捜査に当たった神奈川県警は、殺害された19人を匿名で発表する異例の対応を取った。「現場は知的障害者の施設であり、プライバシーを保護する必要性が高い。遺族も匿名を望んでいる」との理由だ。毎日新聞はさまざまな情報を手がかりに遺族を尋ね歩き、死亡したとみられる約10人の家族に取材を申し込んだが、多くは口を閉ざしている。

被害を免れた入所者の父親（87）は「家族に障害者がいることを周囲に知られると、兄弟姉妹に影響が及ぶ。名前を公表されることで、生活に悪い面が出かねない」と遺族の思いを代弁する。

やり場のない怒りや悲しみを抱きながらも、声を上げることを思いとどまる遺族たち。逮捕後に明らかになった植松聖（さとし）容疑者（26）の言動や供述が、その心情に追いつきかけをかける。「障害者は不幸をつくる人たちだ」「車いすに縛られている利用者も多く、保護者と絶縁の状態も珍しくない」……。

神奈川県障害者運動団体連絡会など県内の10団体は事件後、黒岩祐治知事宛てに申し入れ書を出した。「容疑者の主張は個人の問題でなく、社会の意識の表れと言わざるをえない。この現実こそ、直視されなければならない」と訴えている。

相模原市の障害者施設殺傷事件は、取材で得た関係者たちの証言を積み重ねても、犠牲

者の生きた姿は断片的にしか浮かばない。そこにこそ、悲惨な事件の一面があるようにもみえる。26日に発生から1カ月になる事件は、何を問いかけているのか。

◇笑顔、愛嬌…記憶に 安心できる園、立て直す

平穏な生活は早朝の電話で破られた。7月26日、相模原市の「津久井やまゆり園」に入所する60代の男性の親族のもとに入った連絡は、事件に巻き込まれて死亡したと伝えるものだった。

男性はカブトムシやクワガタムシを捕まえるのが得意で、自宅で暮らしていたころは、「虫捕りの名人」と近所で慕われていた。近くに住む主婦は「夏になると、『捕れたぞー』と子供たちに見せてくれた。子供たちが笑うと笑顔を返してくれた」と目を細める。

ただ言葉をうまく話すことができず、中学を卒業した後は両親の農作業を手伝った。両親が亡くなった後は兄弟が生活を支えたが、40代のころ、ガラスを割るなど本人の安全が危ぶまれるトラブルが続くようになり、やまゆり園に入所することになった。

施設での生活にはすぐになじんだ。「元気に過ごしている」という連絡が親族を安心させた。事件は其中で起きた。親族の一人は「怒りを乗り越し、やり場のない気持ちだ」と語る。

施設の同じ部屋で暮らしていた別の男性も殺害された。軽作業や散歩をして過ごす生活の中で、囲碁と将棋のテレビ番組を楽しみにしていた。「お父さんの趣味だったようだ」。元職員はじっとテレビに見入る姿を覚えている。眉間（みけん）にしわを寄せ、電車の「車掌さん」のまねをしてみせる愛嬌（あいきょう）の持ち主でもあった。「ドアが閉まります。ご注意ください」という声が、職員の耳に残る。

遺族への取材の申し込みに対し、代理人の弁護士を通じ「今は応じられない」との回答があった。弁護士によると、遺族のショックは大きく、心の整理がついていないという。

「元気か」。8月19日、相模原市内の病院の一室。尾野剛志さん（72）と妻チキ子さん（74）が、長男の一矢さん（43）に笑顔で話しかけた。一矢さんは事件で腹などを刺されたが、一命をとりとめ入院中だ。夫妻は「自分たちにとって、息子がどれだけ大切な存在なのかを知ってほしい」と実名を明かして報道機関の取材に応じている。

「被害者の家族の多くは、障害者に対する周囲の偏見で心に傷を負っている」と尾野さんは言う。尾野さんも、親族からの中傷や、近所の冷たい視線にさらされた経験があり、遺族が名前を明かしたくない気持ちがよく分かる。だからこそ、尾野さんは現状を変えるために「勇気を出さなければいけない」と考えている。

最近、一矢さんに笑顔が戻ってきた。見舞いに行くたびにベッドから身を起こして「やまゆりに帰りたい」と訴える姿に尾野さんは心が奮い立つという。「施設を立て直し、安心して暮らせる環境をつくるのが、これからの生きがいです」

【ことば】**障害者施設殺傷事件** 7月26日午前2時ごろ、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で発生。入所者19人が刃物で刺され死亡し、職員3人を含む27人が重軽傷を負った。神奈川県警は、事件直後に出頭した元同園職員、植松聖容疑者（26）を入所者1人の殺人未遂容疑などで緊急逮捕。8月15日、別の9人についての殺人容疑で再逮捕した。

「サイレン聞き逃走断念」 相模原殺傷容疑者、3度目逮捕へ

共同通信 2016年8月25日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され27人が負傷した事件で、元施設職員の植松聖容疑者（26）＝東棟の女性9人に対する殺人容疑で再逮捕＝が「施設を出てから逃げようとしたが、立ち寄ったコンビニでサイレンの音を聞き、逃げられないと思った」と供述していることが24日、捜査関係者への取材で分かった。

2月に衆院議長公邸へ持参した襲撃予告の手紙には「入所者を抹殺した後は自首します」と記していた。神奈川県警津久井署捜査本部は、実際には出頭直前まで逃走を考えていた

とみている。事件から 26 日で 1 カ月。捜査本部は今後、西棟の男性 9 人の殺害容疑で再逮捕し、負傷者への殺人未遂容疑も立件する方針。

捜査本部などによると、植松容疑者は 7 月 26 日午前 2 時ごろ、東棟 1 階から侵入し、職員を縛るなどした上で入所者を襲ったとされる。午前 2 時 38 分に最初の 110 番があった。防犯カメラには同 47 分ごろ、逃走したとみられる管理棟 2 階の出入り口付近を歩く姿が記録されていた。

捜査関係者によると、植松容疑者は「職員が入所者の部屋に閉じこもったので逃げた」と供述。施設を離れた後、コンビニのトイレで血の付いた手や腕を洗い、洋菓子類を購入した。その際、サイレンが鳴り響いていたとみられる。午前 3 時すぎ、車で署に出頭した。

入所者の家族が心境語る 相模原事件から 1 カ月

テレビ朝日 2016 年 8 月 26 日



神奈川県相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件から 26 日で 1 カ月です。現場の施設に入所していた女性と家族が ANN の取材に応じ、「障害者であるからこそ力を合わせて守ってあげなければいけない」と訴えました。

高月淳子さん（60）は 4 人が犠牲になった建物の向かいの棟にいて難を逃れました。淳子さんは両親が他界していて、保護者になっている叔母夫婦は事件の 4 時間後に現場に駆け付けました。

入所者・高月淳子さんの叔母：「いや心配で...顔を見るまで心配でしたよ。元気な顔見てひとえに喜ぶわけにいかないけど、一安心した」

警察によりますと、植松聖容疑者（26）は「障害者はいなくなればいいと思った」などと供述しています。淳子さんの部屋の前の廊下には約 40 メートルにわたって血が点々と垂れていたといいます。

入所者・高月淳子さんの叔父：「血が垂れているのを見て、皆ここで殺されたのかなと思った。こういうことが人間にできるのかという気持ち。見守ってあげないといけない。子どもたちだから。力を合わせて（再発防止を）やってもらいたいという思い」

障害者施設が防犯に本腰 施設徹底、訓練も 静岡

静岡新聞 2016 年 8 月 25 日

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件は 26 日、発生から 1 カ月を迎える。静岡県内の施設は手薄だった防犯対策に本腰を入れ始めた。知的障害者の親たちは、一日も早

く平穏な生活を送れるよう願っている。

「不審者です」。大きな声が上がると、女性職員が火災報知機のボタンを押した。ほかの職員が入所者の居住棟の鍵を閉めたり、入所者を避難誘導したりと慌ただしく動いた。袋井市の障害者施設「袋井学園」で24日、施設で初めてとなる防犯訓練が行われた。



職員扮（ふん）する不審者（右）の侵入を想定した訓練＝24日午前、袋井市の袋井学園

施設では事件以降、施錠や見回りを徹底し、正門にセンサーライトを設置した。警察の指導で防犯カメラやさすまたの配備も検討しているが、「設備投資には限界がある。今ある設備で対応できるようにしたい」と池野正美施設長。火災報知機を押せば広く緊急事態の発生を知らせることができる。訓練後、火災報知機のベルの音が「避難の合図」だと入所者に伝えた。

同じように各施設が対策に追われている。ただ、施設の職員数は十分とは言えない上、女性が多い。立地環境もさまざまだ。「袋井学園」を運営する社会福祉法人理事長で、知的障害者福祉協会の八谷重之会長は「施設の特性に合わせた対策が必要」と説明する。県警は要請のあった40カ所以上で訓練や防犯診断を実施した。県は今年中に防犯マニュアルの指針を作ることにしている。

容疑者が「障害者はいらない」などと主張したと伝えられたことで、知的障害者の保護者でつくる「県手をつなぐ育成会」は各地で話し合いを深めてきた。同育成会の全国組織には激励や同情の一方、容疑者の考えに同調する声も寄せられたといい、小出隆司会長は「現実を突きつけられた」と話す。関係者の連携の重要性を指摘し、「障害のある人を受け入れる、成熟した社会を目指さなくてはいけない」と力を込めた。

相模原事件1カ月

佐賀新聞 2016年08月26日

ずっと胸の底に重いものが沈殿している感覚だという。相模原市の障害者殺傷事件から、きょうで1カ月。佐賀市の知的障害者施設の園長の心は晴れない◆施設には障害の重い人ばかり60人が入所している。保護者と事件を話題にしたことはないが、「いろいろ葛藤はあると思う。夜勤をする職員も動揺している」。施設は安全との前提がくずれた◆障害のことを知ってもらおうと地域と交流してきたが、「事件はそれに水を差す」。町の運動会には出向いて参加し、施設の盆踊りや七夕会には近所の人を招いていた。少し前のこと。施設に工事で来た男性が入所者が気軽に声をかけた。どこから来たのかや子どもがいるのかを聞く。男性もやさしく言葉を返す◆何気ない会話だったが、男性は園長に「この人たちがなんも心配せんでよかごと、おいたちが頑張らんばね」と笑いながらもらった。この社会には弱い立場の人がいる。それなら自分が支えないと、と考えたのである。障害者の存在が周りの生きる力の源となった瞬間だと、園長は強い印象を持った◆「犯人は障害者はいなくなってしまう、と言ったが、彼ら彼女らの生きる意味はある」。事件で警備は厳しくなる方向だ。しかし、障害者は外部の人との交流を楽しみにする。園長は今、社会との接点をなくさない方策を考えている。(章)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行